自分の思いを主体的に伝え合うことができる子どもの育成をめざして

－　Unit3　Our Sister in Nepal　（NEW HORIZON3）　－

１．単元の構想

外国語活動・英語科では言語使用の場面において伝えようとする事柄について文法的なルールに則って考えることができる力を思考力ととらえ，場面，状況，相手の表情等に応じて言語材料を選択し，使い分けることができる力を判断力，そして思考・判断を通して言葉として相手に伝えることができる力を表現力と考えている。これらの３つの力とかかわり合いに視点を当てて，自分の思いを主体的に伝え合うことができる子どもの育成をめざして授業実践を行った。

ドリル，エクササイズで得た知識を使用させる活動であるコミュニケーション活動で活発にインタビューをしたり，会話をしたりしていた生徒が実際にＡＬＴに話しかけられるとコミュニケーション活動で定着させたはずの文法項目が使えない場面に遭遇することがよくある。その要因にはいくつか考えられるが，その一つとして既習の文法事項を運用レベルまで深化させることができていないからと考える。日々の授業で行っているコミュニケーション活動をふりかえってみると，そこで使用される言語はその単元で習う文法項目に限定されており，また，会話例などにしたがって対話したりする形式のものであった。そこには生徒の思考・判断は反映されておらず，表現のみに重点が置かれていたようにも思う。そこで，本単元ではタスク活動とインタビューテストを取り入れ，自分が相手に伝えたいことを適切にかつ正確に表現するためにはどのような形態を用いればよいのかを自分自身で判断して使う場面を設定した。

本単元ではタスク活動をペアで行うこととし，ある程度の決まりはあるものの，自由に自分の思いを伝え合い，２人で会話を進めて課題を解決しなければならない。その時に，相手の反応を見て受け入れたり，自分の主張を通したりと状況を判断して言葉を選択し，使い分けることが大切であり，相手意識が必要不可欠である。自分の思いを独りよがりで表現するのではなく，相手と自分を意識しながら，思考・判断したうえで表現する。そして相手が表現したことについて，さらに思考・判断し，また自分が表現するというスパイラル構造が２人の中で生まれる。しかも，課題を解決するという共通の目標があり，２人には会話を通して協調性も生まれてくる。本単元ではペアでの活動としたが，グループの活動や学級全体の活動へと広げていけば，スパイラル構造も複雑化し，他者の視点がさらに多く入ることで，判断の助けとなり，また疑問も生まれてくる。その中で思考力・判断力・表現力もさらに育成できるのではないかと考える。

３年生の生徒はドリル練習やパタンプラクティス，単語テストなどの繰り返し学習の際，友達と暗唱を確認し合ったり，間違えた文を何度も練習して満点が取れるまでチャレンジし続けるなど，言語材料の知識の習得に熱心に取り組んでいる。修学旅行を終えて「修学旅行の思い出」をテーマに書く活動を行ったとき，Ａ子は沖縄と松江を比べて，自分のもっている知識からOkinawa is more beautiful than Matsue.と表現した。そしてＡ子はその原稿で流暢な英語のスピーチを行った。しかし，友達から首里城と松江城はどちらが美しいと思うかと質問されたとき，Ａ子はＩ think ・・・で言葉が出なくなった。そして教師に「Shuri castle がMatsue castleよりきれいだ」って英語で何て言うのですかと質問してきた。つまり，自分が伝えたいことの言語知識をもっていながらも，自然な会話のやりとりの中で，それを表現することができなかったのである。またこのようなことは他の多くの生徒にも言えることで，定期テストにおいて知識を問う問題の正解率の方が表現力を問う問題の正解率を上回っていることからも伺える。言語に関する知識をもっていてもその知識を活用する段階で必要となる思考力・判断力が充分に育成できていないのではないかと子どもをとらえた。

単元の目標

○現在完了形と既習の表現を適切に使い分けて，簡単な対話ができる。
○不定詞の形・意味・用法を理解し，表現できる。
○課題解決（タスク）に向けて積極的にコミュニケーションを図ろうとする。

本単元はフォスター・プログラムを取り上げ，そのプログラムの支援のためのバザーのポスターを見ての対話やバザー当日の準備の様子，ネパールのフォスターチャイルドのミーナの紹介，ミーナからの支援に対する感謝と近況を知らせる手紙を通して，現在完了形（経験，完了）と不定詞（形容詞的用法，副詞的用法）を学習する。そして現在完了形と既習の文法項目の使い分けの定着を図るためにタスク活動とインタビューテストを行う。タスク活動とは「言語知識を静的なものから動的なものへと変える触媒的なもの」であり，「構造シラバスを基本として構成されている検定教科書を用いた指導を前提として，学習者が使用する言語形式を主体的に選択し，相手との自然なコミュニケーションを通して，与えられた課題を遂行する，原則として対話形式の活動や発表を指すものである。」（高島英幸：実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導）とある。現在完了形と他の既習の文法項目を比較し，選択してその場面に応じた表現を自分自身で判断して使い，友達とのかかわりの中で思考力・判断力・表現力を高め合うという本単元のねらいに適した活動である。そしてテーマを決めないフリートークのインタビューテストは一人一人の思考力・判断力・表現力をとらえ，次への指導の一助となる活動であると考える。

現在完了形は生徒にとって理解するのに困難な文法項目の一つである。そこで，「どういうときに，なぜ過去形ではなく現在完了形を用いるのか」過去形と現在完了形の話し手の視点の違いに注目しながら，２つの用法の違いを感じ取らせたい。そして本単元の学習が今後の学習においてその場に応じた表現を思考・判断し，それを表現することへの意識付けにつながるよう指導したい。また，この題材を通してアジアの国に目を向けさせ，海外の子どもたちの日本とは大きく異なる生活について知り，考えさせたい。

２．単元計画（全７時間）

次	主な学習活動・内容	時	具体的な学習計画
1	フォスタープログラムって何だろう？	1 2	・フォスタープログラムについて理解し，ネパールへの関心をもつ。 ・現在完了形（経験）の形・意味・用法を理解し，表現する。
2	現在完了形の用法（継続・経験・完了）と過去形を比べてみよう	3 4	・現在完了形（完了）の形・意味・用法を理解し，それを用いて簡単な会話をする。 ・タスク活動で現在完了形と既習の表現を比較する。 ・インタビューテストで会話に応じた表現を用いる。①
3	ミーナのネパールでの生活の様子を知ろう	5 6	・不定詞の形容詞的用法の形・意味・用法を理解し，表現する。 ・パンフレットを読んで，内容を理解し，またそれについての感想を述べる。 ・インタビューテストで会話に応じた表現を用いる。②
4	ミーナに手紙を送ろう	7 8	・不定詞の原因を表す副詞的用法の形・意味・用法を理解し，表現する。 ・ミーナからの手紙を読んで内容を理解し，それへの返事を書く。 ・インタビューテストで会話に応じた表現を用いる。③

評価計画

次	時	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解	英語科における思考力・判断力・表現力
1				現在完了形を用いた英文を聞いたり，読んだりしてその内容を適切に理解している。	現在完了形の形・意味・用法を正しく理解し，その運用についての知識を身につけている。	
2		タスク活動に積極的に取り組み，自分の伝えたいことを間違いを恐れずに伝えている。	場面に応じて，適切な文法項目を用いて対話している。			自分が伝えたいことを英文の構成を考え，既習の表現から選択し，相手にわかりやすい適切な表現を用いて伝えている。
3				パンフレットを読んで，その内容について理解している	不定詞の形容詞的用法の形・意味・用法について正しく理解し，その運用についての知識を身につけている	
4		ミーナの手紙への返事を意欲的に書いている。	正確かつ適切な表現を用いて，ミーナに伝えたいことを手紙に書いている。			自分が伝えたい情報を取捨選択して，相手に分かりやすいパラグラフを構築して手紙を書いている。

3．授業の実際

ネパールの自然，子どもたちの様子，学校の様子などを写真を提示してアジアの国に目を向けさせ，日本の子どもたちの生活と比べながらその違いについて考えることを本単元の導入とした。そして，「フォスタープログラムについて聞いたことがあるか」という質問を英語で行い，本単元の言語材料である現在完了形（経験）を導入し，ドリル練習，パタンプラクティスや演習問題などで，基本表現の定着を図った。（1，2時間目）そして現在完了形の3つの用法（継続，経験，完了）を学習したところで過去形と現在完了形の違いをタスク活動で復習した。（3，4時間目）さらにフォスター・プログラムのパンフレットを読んで内容を理解したり，ミーナからの手紙を読んでそれへの返事を書いたりして不定詞の形容詞的用法と副詞的用法の定着を図った。（5，6，7，8時間目）

ここでは4時間目のタスク活動，インタビューテストについての授業のふりかえりを紹介する。

(1) スピーチ活動

毎授業の始めにスピーチ活動を行っている。テーマは「心に残っている旅行」，「地球環境について」

など，その時々の話題で教師が決めている。本時の子どもは「今，自分がはまっていること」でスピーチをした。

> Hello, everyone. My hobby is soft tennis. Soft tennis is a very interesting sport. I have played it for six years. I'm going to play tennis also in high school. I want to be able to play tennis very well. My dream is to join the inter high. Thank you.

そのスピーチに対して質問やアドバイスなどのコメントを発表する時間を設けたが，活発な意見交換とはいかなかった。しかし，一人一人が記入した評価用紙には次のようなメッセージが書かれており，友達のスピーチを聞いて内容を理解し，さらに自分の思いを伝えることができていることが伺われる。

> ○「趣味」というテーマから，自分の将来の夢が出てきて良かったと思います。インターハイめざして頑張って下さい。
> ○ソフトテニスについての夢がとてもよく分かった。頑張って欲しいと思う。声の大きさ，話す速さ，表情がとても良かったと思います。内容もとても分かりやすかった。
> ○とても聞き取りやすい速さでしたが，もう少し声が大きいと良いかなと思いました。オリンピックにも出てみたいと思いますか？

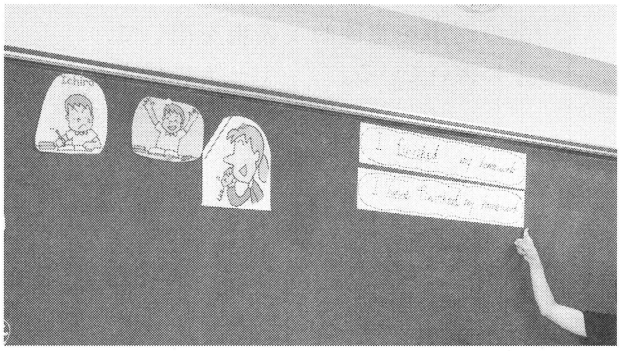
また，評価用紙をスピーチした子どもに手渡すと，うれしそうに友達からのメッセージを読み，笑顔を浮かべていた。このスピーチ活動をもっと充実させて，活発に自分の思いを伝え合える場にすれば，友達とのかかわり合いの中で主体的に思いを伝え合える子どもを育成できる。

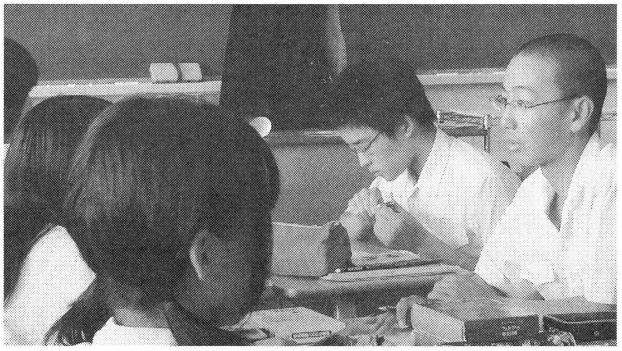
(2) 本時の学習のめあてを知る

「場面に応じて，適切な文法項目を使い分けて，会話してみよう」という本時のめあてを3つの部分に分けて黒板に提示するとともに，本時のスケジュールもホワイトボードで提示した。そうすることで本時の学習のポイントも明確になり，生徒は1時間の見通しを立てて学習することができ，集中力もより高まるのではないかと考えた。

(3) 現在完了形と過去形の違いとその使用場面を確認しよう

視覚的に場面を想起できるよう絵を用いて現在完了形と過去形の違いを確認した。その際に，話し手の気持ちに焦点を当て，気持ちが現在につながっている現在完了形から提示し，話者の気持ちを表現した。そして一連の場面に絵を追加していき，そのときの話者の気持ちを現在完了形と比較しながら表現して過去形へとつなげていった。時間の経過と共に話者の気持ちも変わり，その気持ちの変化が英語でも現在完了形と過去形の違いとなって表現されるということを自然につかめたようである。





(4) タスク活動

ペアになり①待ちあわせをする②観る映画を決める③映画を観る時刻を決めるという3つの場面で会話を進めた。この活動では「謝罪する」「苦情を言う」「質問する」「説明する」「誘う」「賛成・反対する」などの要素が含まれており，現在完了形と既習の文法構造を比較し，使い分ける必要がある。また，ペアで情報量に差が出るように状況を設定した。それぞれの場面の生徒の会話の一例を挙げる。

①待ちあわせ場面の会話

A：I lost my watch. So I'm late.

B：I was waiting for you for ten minutes.

②観る映画を決める場面の会話

A：I want to see Ponyo or Spiderman. Which movie do you want to see?

B：I saw Ponyo with my brother last week. So I want to see Spiderman. Is it OK?

A：Yes. Let's go.

③映画を観る時刻を決める

A：I know the starting time, but I don't have a watch. Do you have a watch?

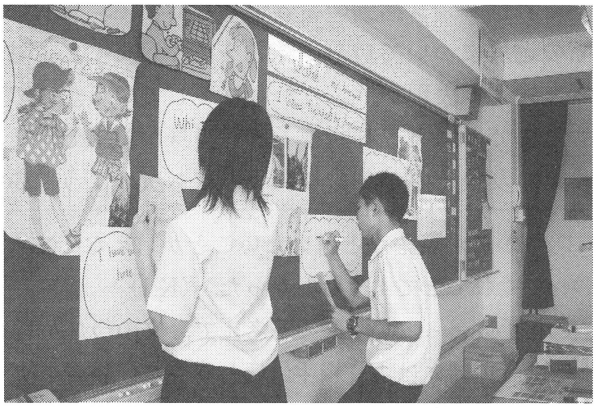
B：Yes. It's one fifteen. I bought this watch in SATY.

これらの会話をまずは紙に書かずに言葉だけでペアでやりとりをした。実際の生活場面により近づけるためである。書く活動ではある程度時間的余裕があり，自分が伝えたいことを文法構造を選択しながら表現できるものである。しかし，実際のコミュニケーションでは話す場面が多く，瞬時に思考・判断という作業を頭の中で行い，自分の言いたいことを適切に伝えなければならないのである。そして相手の目を見て，つなぎ言葉を用いたりとコミュニケーションに必要なことにも注意して会話を進めるよう促した。生徒は自分が伝えたいことがあってもそれを英語で表現できないもどかしさを感じながらも，何とか自分の言いたいことを伝え合い，２人で会話を進めて「何時にどの映画をみるのか」という課題を解決することができた。

(5) 発表し合う

話すことだけで課題を解決し終わったペアから今度は活動中に自分たちが発話した表現をワークシートに記入した。そして幾つかのペアがその表現を黒板に書いてロールプレイをして発表した。

そしてその発表をもとに以下の様に全体にフィードバックを与えた。



①の場面

○待ちあわせに遅れてきたAはまず，I'm sorry. と言うのがコミュニカティブである。

○時計をなくして困っているAの気持ちを表現する場合には I have lost my watch.と現在完了形を用いる。

○「10分も待ったよ。」と文句を言う場合にはBは過去形ではなく現在完了形の I have waited for ten minutes. を用いる必要がある。

②の場面　○過去の事実と現在の気持ちを適切に表現できている。

③の場面　○時計を買ったことについて過去形を使っているが，現在完了形を使うとその時計を自慢したい気持ちも表現できる。

(6) 適切な表現を用いてもう一度，タスク活動を行う

話者の気持ちに焦点を当て，場面に応じた表現について全体にフィードバックを与えたが，そのままでは知識としてのインプットに終わってしまい，その表現を活用する力にはつながらないと考え，改めて適切な表現を用いてもう一度タスク活動を行った。子どもたちには１度目の会話よりも多少余裕が見られ，相手を意識して表現できていたようにも思うが，今度は逆に新鮮味に欠け，話す意欲は低下したようにも思えた。同じ活動を２度行うのではなく，別の形でインプットした表現をアウトプットへつなげる工夫が必要だったのではと感じた。

(7) ＡＬＴとのインタビューテスト

英語科では学期の終わりにＡＬＴとのインタビューテストを行っている。ＡＬＴと１対１での会話の時間を設定し，自分の思いを主体的に伝える機会としている。会話に応じて，正しい文法項目を選択し，それを正しく用いて適切に表現することを目的に今回のインタビューテストはテーマを決めずに，フリートークとした。近づく夏休みの話題では未来形を使い，去年の夏休みの話題では過去形を使うなど，既習の文法項目を場面に応じて選択できている子どもや伝えたい内容は分かるのだが，文法ルールに則って英文を構築できていない子どもなどさまざまであった。子ども一人一人の思考力・判断力，そして表現力を見とる良い機会にもなった。これを今後の指導につなげていきたい。

４．成果と課題

○場面に応じてとなると，普段の筆記ではスラスラ書けるのに，今日は少しとまどいました。頭の中で文章を組み立てるのに若干時間がかかるので，その部分を今後克服したいと思います。(A.K)
○自分の中にある言葉の引き出し，文章の引き出しからどれを取り出して，どのようにつなげればいいのかとても考えさせられました。(N.J)

これはタスク活動のふりかえりである。A.Kは言語に関する知識はあるのだが，頭の中での思考・判断の過程について自分の課題を見つけている。また，N.Jも思考・判断・表現を引き出しという言葉に置き換えて表現し，ふりかえりをしている。このようにタスク活動を通して自分の伝えたいことを表現するまでの思考・判断を子ども自身が意識し，その必要性も感じることができたのではないだろうか。また，友達とのかかわりについても次のようなふりかえりをしている子どもがいた。

○なかなか英語だと言いたいことが言えなくて大変でしたが，途切れ途切れでも相手がきちんと理解してくれてとてもうれしかった。(K.I)
○相手の言っていることを考えて，文のつながりを考えることが大切だと思いました。(M.T)
○会話の時にはより相手に伝わりやすい表現を使うと楽しくなると思いました。(K.N)
○自然に英語を使って会話をするのはちょっと難しいと思った。でも意味が通じ合ったときはなんだか達成感みたいなものを感じることができたと思う。(H.T)

相手に伝わりやすい表現を用いようとしたり，相手の言っていることを理解しようとしたりと相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする中で，そのためには自分は何をどのように伝えたらいいのだろう，相手の言っていることに対してどのように反応したらいいのだろうという思考・判断の根底となる視点が芽生えたのではないだろうか。また，意思疎通ができたときの喜びがさらに自分の思いを伝えたいという主体性にもつながるのではないかと感じた。

今後の課題としてタスク活動などのアウトプットの活動をさらに充実させ，より実際の言語使用場面に近い形の言語活動を多く取り入れる必要がある。また，アウトプットさせるためには言語材料の効率的なインプットも必要であり，ドリルやエクササイズなどのインプットの活動を工夫し，基礎，基本の習得もさらに確実なものにしなければならない。そして他とのかかわり合いについてもペアからグループ，そして学級全体へと広げていき，ありのままの自分を出せるような人間関係を構築することが大切であると感じた。

（文責　高田　純子）